「自己責任」について考える

ある作文から

貧乏で子どもが育てられない？ じゃあ産むなよ、自己責任。
ブラック企業勤めで病気になった？ 辞めればよかっただろ、自己責任。
性犯罪の被害者になった？ 一緒に酒を飲んだくせに何を言うんだ、自己責任。
とまぁこんな具合である。
ちなみにここでいう「自己責任」はすべて、「自業自得」に言い換えられる。

「がんばれば報われるのになんでやらないの？」
この『自己責任論』の厄介なところは、「がんばれば報われる」という美しい言葉と表裏一体なところだ。
出発点は「努力すればいい結果を出せるはず」。
だから「報われないのはがんばっていない証拠」。
そしてそれは「お前がいけないんだ。自己責任」。

こういう論法なものだから、『自己責任』という言葉を使えば、「がんばれば報われたはずなのになぜ何もしないんだ、自分が悪いんだろう」とかんたんに人を責めることができる。

「貧乏でもがんばって子どもを育てている人がいるのに、なんでお前はできないんだ」「ブラック企業で働き続けたのは自分の意思なんだから文句を言うな。俺はもっと働いている」「自衛していたら避けられた性犯罪なんだから自分が注意すべきだった」この論法の出発点はあくまで「自分の行動を変えればいい結果になるはず」というポジティブなものだから、なんだかそれっぽく聞こえてしまう。

驚いた。純粋に、驚いた。
みんなが平等に、同じ土俵で戦っていたわけではなかったのだ。
塾も行けて、好きな大学を受験して、受かった大学にいける。それが恵まれた環境であることすら知らなかった。
だから平気な顔をして、「結果がでないのは自分の努力不足」だなんて思えていたのだ。なんて傲慢だったんだろう。

「どうにかできたはず」は恵まれた人の理論
わたしはただ、偶然、運良く、両親のおかげで恵まれた環境にいられただけ。
それに気づいてからは、他人に対して「どうにかできるはずでしょ」だなんていえなくなった。だってわたしも、「向こう側」だったかもしれないんだから。
「努力すればいいだけじゃん」というのは、可能性を見出す希望の光でもあり、無邪気に相手を追い詰める言葉でもあるのだ。

努力で変えられる範囲は、人によってちがう
準備運動をせずに運動して怪我した。
医者に止められてるのに暴飲暴食を続けて体を壊した。
勉強しなかったから留年した。

それだけ聞けば、だれだって「自己責任だ」と思うだろう。
そこで救済を求める人がいれば、「甘え」だと批判されるかもしれない。

実際、わたしは高校3年生くらいまで、この『自己責任論』を、なんの疑いもなく信じていた。

全員が同じ土俵で戦っているのではないと気づいた日
そんな考えが明確に「まちがっている」と気づいたのは、高校3年生のころだ。
受験生として毎日塾に通い、模試の結果に一喜一憂し、自分の進路について考える時期。友だちとの会話も、しぜんと将来の話になる。

わたしは「勉強すれば大学に受かる」と思っていたし、実際、ちゃんとまじめに勉強して、着々と成績を伸ばしていた。「希望の進路に進めないのは本人の努力不足以外ありえない」と、なんの疑いもなく思えていたのだ。

でもそれは、まちがっていた。「受験料が高いから、国公立1校と滑り止めの私立1校しか受けられない」「夏休みの集中講義のために日雇いバイトに何回か行かなきゃ」友だちからそんなことを聞いたのだ。

わたしは、心の底から驚いた。合格発表の時期になったときも、それぞれの環境のちがいは、そのまま人生の選択肢のちがいに直結した。
「早稲田に受かったけど、特待生で授業料免除になる下位ランクの大学に行くしかない。就職が心配だ」「これ以上親に迷惑をかけられないから、宅浪かな。気晴らしでたまにバイトすれば模試代くらいは自分で払えるし」
そんな声を聞いた。

でも、問題ある教師が準備運動をさせずに生徒に運動を強制して怪我したとしたら？　長時間労働とパワハラで精神的に追い詰められて暴飲暴食に走っていたら？ 病気の親に変わって新聞配達で生計を立てていたがゆえに留年したとしたら？ そういう事情がないって、本当に言い切れるんだろうか？

人にはそれぞれ事情がある。言える事情も、言えない事情も。
そう思うと、「結果が出ないなら自分のせいじゃん」「もっとがんばればよかったじゃん」なんて言えない。自分が逆の立場だったとして、それを言われたら、「じゃあどうすればよかったんだよ！　助けてくれなかったくせに！」と思うだろう。「なにも知らないくせに！」と。

人生の分岐点や決断において、たいていの場合は「環境」が大きく影響する。
だから、他人に対して「自分が悪いんでしょ」と言うのは、やっぱりちょっとちがうんじゃないかと思うのだ。
だって、「自分でどうにかできる範囲」は、人によって大きく異なるのだから。

自己責任論より「逆の立場だったら」という想像を
自分自身の行動の責任を自分で負う。それ自体はごくふつうの考えだ。
でも事情をよく知りもしない他人が、「お前の言動で結果を変えられたはずだからお前が悪い」と自己責任論を振りかざすのは、ちょっとちがうというか、冷たいというか、偉そうだ。

最近よく『自己責任論』を聞くけど、それはだれかを追い詰めるだけで、なんの解決にもならない。
本人が悪ければ反省すべきだが、だからといって外野が過剰に責めるのではなく、「同じようなことが起こらないためになにができるか」「自分が逆の立場だったらどうしただろう」と想像することのほうが、よっぽど大事じゃないだろうか。

昔のわたしのように、「努力すればどうにかなるんだから、望まぬ結果が出たらそれは自分が悪い」と言うのは、恵まれた人の上から目線理論にすぎない。

人にはいろんな事情があり、どうにもできないことだってたくさんある。だから助け合いが必要なのだ。
『自己責任論』を唱える前に、「本当に本人の努力だけでどうにかなったのか」「逆の立場でそれを言われたらどう思うか」を考えていきたい。

日本の親は
「人に迷惑かけてはいけない」
って教えるけど
インドの親は
「お前は人に迷惑かけて
生きているのだから、
人のことも許してあげなさい」
って教えるらしい。

問い

派遣社員のAさんは、法定制限ギリギリに働いて月給が16万円、税金や保険料などを引くと実質12万円です。3週間前に派遣契約を切られることを言われて、その後すぐに職を探しましたが、年齢などの条件に合わず見つかりません。このままだと貯金も底をつきます。

このような場合、きちんと正社員にならなかったAさんの自己責任だと思いますか？

「自己責任論」は日本特有の問題か？

「本来、チャンスが平等ならば、能力や成果次第で未来を切り拓いていけるという能力主義の原則は崇高であるはず」とした上で、「能力主義には自己責任論に直接的に結びついてしまうという残酷な一面がある」と警鐘を鳴らした。

https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_6167746fe4b065a5496f8d69

能力主義が自己責任論に結びつくメカニズム

　サンデル教授は、能力主義は「勝ち組」と呼ばれる人々に「自分の成功は自分の努力で勝ち取ったもの」「だからこの成功によって得た利益を自分は得るに値する存在だ」と思わせてしまう、と指摘する。この考え方が困難を抱える人たちに向けられると「あなたが辛い状況にいるのは、努力が足りないからだ」という眼差しになりえる。

https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_6167746fe4b065a5496f8d69

「自己責任」の言葉が持つ冷たさ

作家 平野 啓一郎氏の感想

「日本はいまだにジェンダーギャップも非常に大きく、世襲議員も多いという現状があります。行き過ぎた能力主義や自己責任論が、”勝ち組”と”負け組”の分断を加速させ、社会的に恵まれない人を深く傷つけている一方で、もっと優秀な人にリーダーになってほしいと能力主義を熱烈に求めているという矛盾した状況があります」

https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_6167746fe4b065a5496f8d69

問い

あなたは、サンデル教授の「実力も運のうち」という考え方について、どのように考えますか？

行き過ぎた能力主義が分断を生むという考えについて、どのように考えますか？

問い

あなたはこれまでに同調圧力を感じたことがありますか？

同調圧力についてどのように考えますか？

互いに感じたことを話してください。

問い

あなたの普段の生活において、知らないうちに流されて、危険を感じたり、後悔するようなケースはありませんでしたか？